

人間的世界経験のパラドックス構造 —マッハ自画像の「実験」・自我体験・心理学の躓きの石—

Paradoxical structure of experiencing the human world:
“Experiment” by Mach's self-portrait, “I-am-me” experience, and a
stumbling-block in psychology

渡辺 恒夫*

§ 1 プロローグ：人間的世界経験の根源 のパラドックス構造とは何か

人間的世界経験の根源的パラドックス構造とは何か。それをまず次のように定式化しよう。

「私は自分が人間一般の一例であることを知っているが、人間一般は直接には経験されない（現象しない）。直接経験されるのは自己と他者のみであるが、私はそのことを知らない（自覚しない）」。

—私はいろんな人と出会っているが、ことごとく「他者」である。一人になることもあるが、その時は「自己」と向き合うのである。自己でも他者でもない「人間一般」などという存在には会ったことがない。直接経験されるのは自己と他者のみなのである。にもかかわらず、私は自分が人間一般の一例であることを知っている。考えてみればこれは不思議なことではないだろうか。

とはいえ、このようなことを言いだしても、ただちに次のような反論によって一笑に付されてしまいかねないことも事実だろう。—「誰でも同じように自己と他者のみを直接経験するという意味で、私は誰でもの一人に過ぎず、つまり人間一

般の一例に過ぎないではないか！」

これに対しては、次のように反批判をすることができる。「けれども、『誰でも同じ』ということが、いったいどうして分かるのだろうか？」

かくして、他者の一人一人が、私と「同じ」であることがいかにして認識され、正当化されるかという「他者問題」が、哲学上に問題化されることになる。けれども、それは本稿の目指すところではない。本稿の目標は、人間的世界経験の根源的なパラドックス構造を（以下は略して「パラドックス」と表記する）心理学において問題化することにある（それが、パラドックスの構造を体験として明確にすることの一助ともなる）。

そもそも、心理学も人間科学である以上、人間一般の概念を前提としている。もちろん、私は自分が一個の人間であることを、つまり人間一般の一例であることを「知っている」。それは自明な知であって、心理学の日々の営みにとってはことさら問題になることはないように思われる。

けれども少し反省してみると、鳥類学にとっての鳥一般のようには、心理学にとっての人間一般は自明でないことが分かる。鳥一般の一例としては、とにかく最初に目についた鳥を観察すればよい。ところが人間一般の一例について観察を始め

* 明治大学情報コミュニケーション学部兼任講師／東邦大学名誉教授。Email: JCB02074@nifty.com

ようとする、ここにいる当の観察者である私自身で済ませるか、それとも誰か他人を連れてくるかという、「サンプリングにおける自他選択問題」にぶつかってしまうのだ。

このようなことを問題にする心理学者は、まず見当たらないように思われる。けれども、少なくとも一世紀ほど前、心理学が自然科学と同様の科学たらんとして方法論的模索を続けていた時代には、問題になったのだった。そもそも心理学が自然科学のように統一パラダイムを見出すことができず、混乱と分裂を際限なく繰り返していること自体、つまり心理学の歴史自体が、このパラドックスが心理学にとっての躓きの石であることを示している。それが、本稿の後半部分のテーマとなる。

それにしても、パラドックスを、心理学史を通じて焙り出すというのでは、アプローチとして間接的になってしまおう。そこで、本稿の前半ではより直接的に、パラドックスが「体験現象」として経験心理学的にアプローチできるものであることを示したい。すなわち、以下に本稿の概要を述べるならば、§ 2では、日常は実感されないこのパラドックスの体験を、「実験的」に誘発することが可能であることを示す。§ 3では、「自我体験」の名のもとに研究されている体験現象が、このパラドックスの、精神発達途上における顕在化であることを明らかにする。後半に入って§ 4では、このパラドックスこそ心理学を始めとする人間科学の躓きの石であるという観点から、心理学・人間科学の諸潮流の解釈を試みる。§ 5では、すでに話題に上った「他者問題」をパラドックスという観点から位置づけ直すなど、人間の世界経験のパラドックスの、射程を展望する。

§ 2 マッハ的自画像の「実験」¹

「実験的誘発」の材料に用いるのは、およそ一世紀前、物理学者にして哲学者のエルンスト・マッハが、その著『認識の分析』（須藤吾之助・広松渉（訳）、法政大学出版会、1971（原著1899））の中で描いた「自画像」である。

筆者が「描画課題」としてのマッハ的自画像に興味を抱いたのは、環境科学の教育に携わるようになり、フォン・ユクスキュルの「環世界 Umwelt」² の概念を実感してもらうのに好適と考えたからだった。けれども、「自分の眼に見えるがままに忠実に写生して自画像を描いてください。鏡や写真を使ってはいけません」と指示しただけで自画像をマッハ的に描いて貰うことは難しい。じっさい、いろんな大学の授業や学会での講演などで、上記の指示のもとに自画像を描いて貰う「実験」を行ってみると、どんなに「自分の眼に見えるがままに忠実に」を強調しても、ほぼ例外なく、「他人から見えると想像される自分」の絵が描かれてしまう。

順序を変えて、まずマッハの自画像を見せ、このように自画像を描くのだよ、と言って「宿題」にすると、マッハ的自画像を描いて来ることは来る。その場合でも、教示をよく聞いていなかったものか、他人から見える自己像を描いてくる例が一人や二人は必ず出る。

教示を「同じ画面の中に自画像と他者像を描く」というように変えても同じことである。他者像として教壇に立つ筆者を、自分に見えるがままに忠実に描いた傍に、幽霊のように首だけの（他人から見えると想像される）自分が漂っていたりする。

これらの経験は、いかに主観的にものを見るのが難しいかを物語って余りある。科学教育は客観的なものの見方を教えようと躍起になっている

が、主観的なものの見方こそ学び直されなければ
ならないのだ。



図1 マッハ的な<自己と他者>像

そこで試みに、次のような実習課題を出してみた。①「自分の眼に見えるがままに忠実に自画像と他者像を一つの画面の中に納まるよう描いて下さい」という指示の下、授業中に画を描く。②次に、マッハ的に<自己と他者>像を描く手本として、マッハの自画像に他者が闖入した絵が提示される(図1)。③次週までに「マッハ的な自己と他者像」を家で描いて来る。④図1を見る前に描いた絵と見た後で描いた絵とを比較し、どのような変化があったかの考察を、①③の絵と併せてレポートにして提出する。

提出されたレポートには、少数ながら興味深いものがみられたが、なかでも次の例は最も興味深いものであった。

まず①の絵が、教室で隣に座った友人の顔と自分の顔が共に正面を向いて並んでいるという、よくある構図で描かれた。

次に③の絵は、ファストフード店で描いたというが、マッハの自画像が描かれ、視野の奥ではテーブルを挟んで友人が正面を向いて(つまり描き手と正対して)飲み物を飲んでいる。

出色なのは次の「④考察」である。

<考察>:(i)昔から自画像を書くとなると、なにも考えずに自分のイメージである写真や鏡で見た他人から見える間接的な自分の姿を描いていた。(ii)しかし、今回は自分から見えるがままの自分を初めて描いた。(iii)ここで私は、普段自分を、絵を書いた中の他人と同じ人間の一人として捉えていることに気づいた。(iv)そして自分は本当に他人と同じ存在であるのか(うまく表現できないが)という不思議な感覚も感じた。(註文章に振られた番号は引用者による)。

これだけではわかりにくいので解説を加えよう。

文章(i)と(ii)はそれぞれ、マッハ的の自画像を見る前と見た後に描いた絵に対応している。

文章(iii)「普段自分を、絵を書いた中の他人と同じ人間の一人として捉えている」とは、日常、図2のような上空飛行的視線によって鳥瞰される無数の人間達の一人としての、つまり<人間一般>の一例としての自己を自明として生きていた、という意味である³。そして文章(iv)は、マッハ的に<自己と他者>像を描くことで、人間一般の一例としての自己の自明性が、いわば「ひび割れた」事態を示している。それが、「自分は本当に他人と同じ存在であるのか(うまく表現できないが)という不思議な感覚」という表現になっていると思われる。

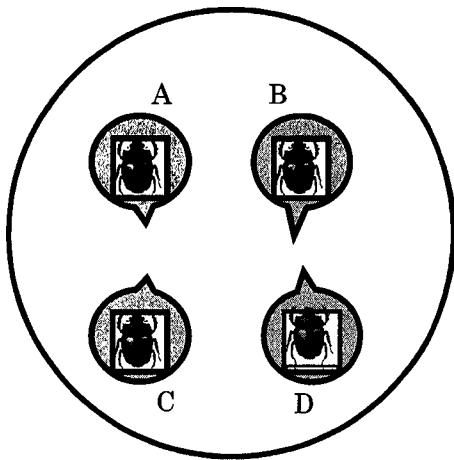


図2 私が「知っている」人間の世界。上空飛行的視線の下、各人の頭の中に「ウィットゲンシュタインのカプト虫箱」(註3参照)が描かれている。

この、「不思議な感覚」と言う表現こそ、パラドックス体験の浮上を示唆するものと考えられるのである。

また、ここで、図1と図2は、パラドックス体験の図解として、すなわち図1を直接経験される(が私の知らない)「自己と他者」の世界、図2を私が知っている(が直接経験できない)「人間一般」の世界として、解釈できるのである。

次に、個人の精神発達上、児童期から思春期にかけて生じる自我の発見の体験として回想法により研究されている自我体験を、パラドックス体験の浮上という観点から考察する。

§ 3 自我体験とパラドックス体験

3-1 マッハ的自画像「実験」結果の、自我体験としての解釈

まず、自我体験の枠組みを用いて、前節の「実験」結果を解釈してみよう。

自我体験は、アメリカの現象学者スピーゲルバーク、オランダの発達心理学者コーンスタムらによっても散発的に研究されて来たが⁴、組織的

な調査研究は日本でのみ発展している^{5,6,7}。ここでは、日本での研究中、自我体験の詳細な判定基準を提供している渡辺の研究を主に参照する。表1に、「記述的現象的定義」「判定基準」「具体例」をまとめておいた。なお、表中の「独我論的体験」とは、元々、自我体験の下位類型であったものを、渡辺⁶が独立させたものである。ちなみに自我体験の想起率は、高校生・大学生の間で20%~30%であり、その中でも独我論的体験は大学生で約6%という結果が出ている。また、自我体験の初発の年齢的ピークは8歳~11歳という児童期に位置することが示唆されている(註5文献参照)。

表1 自我体験・独我論的体験の定義・判定基準・具体例(註6文献に基づき作成)

記述的現象的定義
自我体験：個別的特定の同一的存在としての自己の自明性の破れ 独我論的体験：類的存在としての自己の自明性の破れ
判定基準
自我体験判定基準：(1)を必須条件とし、さらに(2)(3)(5)のうち1つ以上の基準を満たしていること。 独我論的体験判定基準：(1)と(4)の双方を満たしていること。
(1)自己が何らかの形で主題となっていること。 (2)突発性 普段の生活とは連続しない特殊なエピソードとして回顧されていること。具体的には「ふと」「突然」「瞬間」などの表現によって、その体験が生じたときの「唐突さ」や「脈絡のなさ」が記述されていること。 (3)違和感 何か理解しがたいことが生じている、あるいは、その体験が普通でない、という独特の感じが伴うこと。 (4)孤立と隔絶 自分という存在が、全ての他者、さらには世界全体と対置され、自己の孤立性や例外性が強く意識されていること。 (5)自己の分離 自分という存在が2つに分離して感じられたり考えられたりしていること。なおこの基準の適用に際しては、それまでの自己の自明性に対する違和や懐疑が認められるかどうかをチェックした。
具体例
自我体験：(20歳/女子)6歳か7歳くらいの頃、ある晴れた日の正午ちょっと前、二階の部屋にいて、窓からさしこむ日差しをぼーっと見ている時に、「私はどうして私なんだろう、私はどうしてここにいるんだろう」と思った。 独我論的体験：(20歳/女子)5歳—人間がそれぞれ個々に考えていることが見えないのがとても不思議だった。自分はいつもたくさんのことを考えているのに、他の人は何を考えているのか全くわからなくて、実は自分以外は何も考えないような存在なのではないかと本気で思った。

この判定基準に照らすと、§2 描画課題での「考察」(p.85) のテキスト事例は、まず(1)と(4)が適用され、独我論的体験と判定される。ついで、「……という不思議な感覚も感じた」という表現から、(1)と(3)が適用されて自我体験とも判定されることになる⁸。

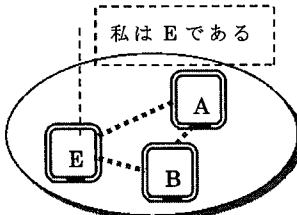
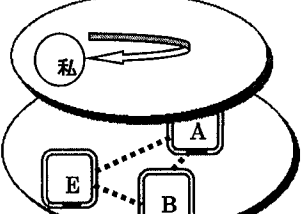
3.2 パラドックスの形而上学的克服としての事例エミリー

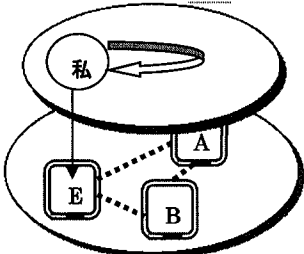
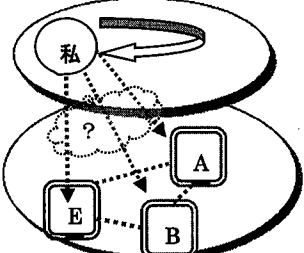
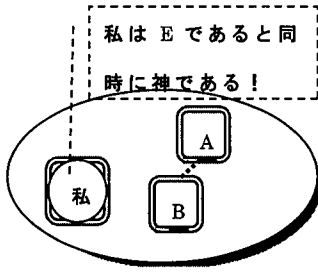
描画課題で実験的に誘発された体験が、自我体験・独我論的体験であると判定されたのだった。では、自我体験・独我論的体験とは、いったい何を意味しているのだろうか。渡辺(註7文献)は、フッサールの心理学的現象学の枠組みを用い、ブランケンブルク⁹の「統合失調症性的エポケー」から想を得て、これらの体験に「発達性エポケー」の名を与えている。現象学的還元を企てる哲学者でなくとも、統合失調症性的エポケーに苦しむブランケンブルクの患者でなくとも、人は、精神発達の途上、とりわけ児童期に、自生的な現象学的

還元を経験することがある。これが、発達性エポケーである。発達性エポケーは、表1の「具体例」のような児童期に限らず、青年期や女性の場合の妊娠出産期、さらには死に直面する老年期といった、人生の曲がり角の時期にも生じることが報告されている(註6文献)。

この発達性エポケーを、人間的世界経験のパラドックスという面から再検討してみよう。そのために、渡辺(註7文献)が発達性エポケーの典型例として扱っている「事例エミリー」における現象学的分析の例を引用しよう。なお、原文はリチャード・ヒューズによる小説作品『ジャマイカの烈風』(小野寺健(訳)、晶文社、2003(原著1929))中のエピソードである。表2で、原文を左欄に、分析の結果を右欄に置いた。本来の現象学的分析表は3段階(左中右欄)からなるが、本稿は現象学の方法をテーマとしたものでないので、中欄は省略して原テキストと結果のみ記載した。

表2 事例エミリーの現象学的分析表。左欄が原テキスト、右欄が現象学的分析の結果としての内的体験構造図解と解説(註7文献, pp.138-139, 212-213を元に作成)。

<p>(1) ままごとをしていた。やがてそれにも飽きて、ややぼんやりと船尾の方へ向って歩いて行きながら、何となく蜜蜂と仙女王のことを考えていると、</p>	<p><体験> 以前の世界。「私がエミリーである」ことは、アダムがアダムであり(A=A)、ベッキイがベッキイ(B=B)であることと同様に自明である。A、B、Eが人間一般という類的関係を形成することが、相互間の点線で示されている。</p>	
<p>(2) そのときとつぜん、自分はたしかに自分だということが、心にひらめいたのであった。／彼女はその場に釘づけになったまま、目のとどくかぎり自分の身体を見まわした。</p>	<p>「私は私である」ことに突然気づき、自同律の出現(自己再帰的矢印で表示)と共に、内的世界が出現して世界が二重化する。</p>	

<p>(3) こんどこそ自分はエミリー・バス=ソーントンだ(…), というこの驚くべき事実を確信できた彼女は、真剣にその意味を考えはじめた。</p>	<p>「私はエミリーである」という自明な事実にあらためて驚く(「私」から「E」への矢印で表示)。</p> 
<p>(4) 第一に、世界中のどんな人間にでもなれたかも知れないのに、自分を特にこの人間、エミリーにするようにしたのは、どういう力なのだろう? ……自分が自分をえらんだのだろうか、それとも神のしわざなのだろうか。</p>	<p>「私=E」の再発見によって、「なぜ私はEであってAやBでなかったのか」という疑問、「意識の超難問」(註10文献参照)が生じる。</p> 
<p>(5) ここまで考えると、また新しい問題がでてきた。神とは誰なのだろう? ……ひよっとすると、あたし自身が神ではないのか? ……彼女は、とつぜん、恐怖に打たれた。知っている人はいるのだろうか(つまり、彼女がエミリーという特定の間人であって—それどころか、もしかして神で—ただの、どこにもいる少女ではないということを知っている人が)? ……どんなことがあっても、この事実は隠しておかなければならない。</p>	<p>「エミリーは人であって神であるという唯一特殊なあり方をしている」という化身教義の創造によって疑問が答えられる。私がエミリーを「選んで」生まれた理由がエミリーの唯一性特殊性によって根拠づけられるからである。</p> <p>箱の中に描かれた私</p> <p>は、(4)での私^④が回収されたものとみなすことができ、この回収によって世界の二重化が解消する結果になっている。同時に、それによって他の箱(A, B, etc)にくらべて次元高い「内面」を備えることになり、エミリーの唯一性特殊性が表現される。</p> 

ちなみに、表2右欄の図解は、フッサー現象における「本質観取」を現代心理学的に技法化した「構造図解法」に基づくものである(註7文献参照)。まず(1)~(4)までが「自我体験」と判定されるが、この体験過程は以下のように説明される(註7文献, p.143)。

「私がエミリーであること」を自明としていた6歳の子どもが、突然、「私が私である」ことに気づき、そのために「私がエミリーである」ことが驚くべきこととなり、「なぜ私は他の誰かでないのか」という「意識の超難問」¹⁰を呼び起こされる。これは、図解でみると、「私」が、「私=私」の自覚の世界と、「エミリーという人類の一員

として生きる世界とに引き裂かれ、二重所属の状態に置かれたということを示している。

次に、(4)から(5)への変化は、類的存在としての「エミリー」が同時に唯一者としての「神」でもあるという「化身教義」の創造による、自己分裂と二重所属状態の克服の試み、と解釈される(註7文献, P.210)。結果として成立した(5)の世界観は、表1の判定基準に照らすと「独我論的体験」ということになる。

これを、パラドックス体験の図解としての§2の図1、図2に当てはめると、表中で自己再帰的矢印で示されている「私=私」の自覚の世界が、図1のマッハの世界に当たる。そして、「エミリー

という人類の一員」として生きる世界（二重化した世界の下側の世界）が、図2の「人間一般」の世界ということになる。私＝私の自覚によっていったんは図1と図2というように二重化した世界が、化身教義の創造といういわば形而上学的な離れ業によって、強引に一重へと縫い合わされたのである。事例エミリーとは、まさに、人間的経験のパラドックス構造の自覚と、その形而上学的克服の物語と言えよう。

以上、§2, 3を通じ、パラドックスを「体験現象」として経験的心理学的な水準でアプローチできることを示した。次に、心理学史・心理学認識論の水準で、パラドックスへアプローチしてみよう。

§4 心理学の躓きの石とは

4.1 操作主義哲学と「他者の心理学」

まず取り上げるのは、精神物理学者スチーヴンスの操作主義哲学¹¹である。プロローグに書いた「サンプリングにおける自己選択問題」への、科学的心理学創成期当時の方法論的自覚の典型が見られるからである。

操作主義は、物理学者ブリッジマン(P.W. Bridgman, 1882-1961)の、「電子」や「時間」といった直接観察されない曖昧な対象や概念を操作的定義によって一義的にするという、科学方法論として始まった¹²。これを認識論的哲学として心理学に導入するに当たってスチーヴンスは、科学性への深い反省に基づき、一組の認識論的決断を行ったのだ。操作主義の原理として挙げられている6カ条を元に説明しよう。

まず、第1条「公共的かつ反復可能な操作に基づいて構成された知識のみが、科学の仲間入りを認められる」(註11文献, p.517)は、自然科学の世界では常識ともいべき観察の公共性・再現

性という科学性の要件を言い直したものに他ならない。次の第2・第3条には、「心理学では全ての観察を、心理学者が自分自身についてなした観察をも含めて、『他者』についてなされた観察であると見なす」という、重大な認識論的決断が謳われる。図1の、マッハの自己と他者像の世界を見してみるならば、心理学的観察は私自身の感情や物の見え方を内省し自己観察することから始めることもできるし、向うの人の行動や表情を観察することから始めることもできる。けれども操作主義は、心理学研究が他者の観察から始まることを要求する。たとえ私自身の心理を観察したとしても、心理学は、研究対象に対して常に他者の視点を取るという意味での、「他者の心理学」でなければならない。なぜ心理学が他者の心理学でなければならないかは、第1条の、観察という操作における「公共性」の要請から直接導きだされよう。観察者が多ければ多いほど観察の公共性は高まる。「他者」についての観察であれば、理論的には観察者の数は無限にできるのである。

操作的定義について述べた第4条の次の第5・6条には、「弁別、すなわち分化反応が、根本的な操作である」という、もう一つの認識論的決断が謳われている。他者の心理学であるだけでは科学性の十分条件とはならない。たとえば写真を見て「美しい」などと発した言葉を録音した質的データは科学的データとはいえない。科学的データとするには弁別反応に基づかなければならない。そこで、美しさの段階を何段階かに分けて弁別をさせ、その結果を得点化して数値化するといった心理測定法が発展する。弁別反応を基本的な操作とすることは測定し数量化するということである。なぜ心理学は質的記述にとどまらず数量化されねばならないのかは、第1条が意図する「再現性」の要請から導きだされる。言語表現だけでは一義性が乏しく再現可能性を持たない。弁別反応に基

づき測定し数量化して初めて、共通の測度に基づき再現可能となる。

このように操作主義の6カ条を、第1条を基準に構成し直すと、操作主義とは、公共性・再現性という自然科学的な科学性公準の、直截な実現を意図したものであることが明確になる。操作主義的認識論の構造を図3として示そう。

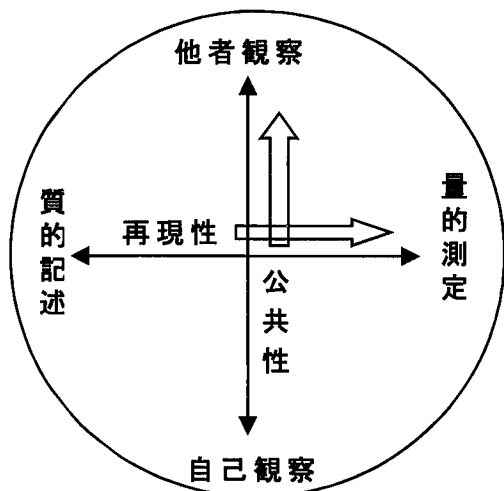


図3 操作主義認識論の構造。再現性はX軸右側ほど勝り、公共性はY軸上側ほど勝る事象が、矢印の向きで示されている。

4.2 認識論的解釈格子

ここで、図3が、パラドックス構造の図解を構成する図1と図2の、どちらに似ているか、という問いを発してみよう。自己と他者というカテゴリーが出現していることからして、図1に近く思われる。図4は、「私の経験する世界の基本的構造」と題して、図1的なマッハ的自己と他者世界を念頭において筆者が他の処で描いた図解であるが¹³、図3との同型性は歴然としている。このことは、自然科学的観察を認識論的に反省するならば、それは自己観察でなく非自己への観察であること、それゆえ人間の世界に操作主義のように科学性の公準を適用すると、図2の中の「人間一般」ではなく、図1の直接経験の世界に現出した非自

己(=他者)が、観察対象として析出することを意味している。

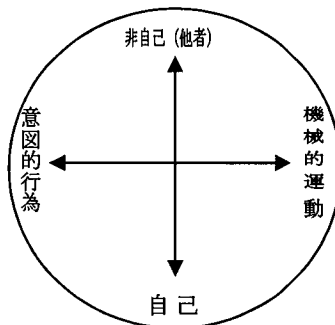


図4 私の経験する世界の基本的構造

図5は、図3と図4の同型性を元に考案された「認識論的解釈格子」である。詳細は註13文献を参照して欲しいが、各象限として現出した「行動」「表現」「体験」「意識」とは、心理学の対象を意味することになる。ゆえにこの図は、心理学が、対象を異にする複数の別個の科学の集合体であることを示すものとなる。

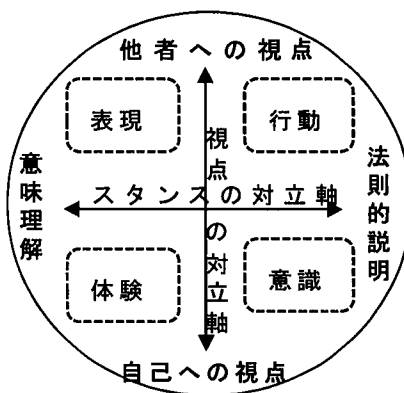


図5 認識論的解釈格子。各象限は心理学の<対象>を表す。

ここで、解釈格子を構成する二つの対立軸のうち、どちらがより根源的な対立かといえば、視点の対立軸ということになる。スタンスの対立軸の方は、その名の通りスタンス(研究者の姿勢)で変わることがある。対するに視点の対立軸は、ここに居る人(自己)とあちら側の人びと(他者)

という、マッハ的現象世界の根本構造に由来するのだから。

4.3 躓きの石を回避する三つの途（1：他者の心理学）

以上のことを念頭において図5を眺めるならば、心理学の躓きの石が、象限間の無自覚な越境・侵犯にあることに気が付く。とりわけ視点の対立軸を踏み越えることは、收拾のつかない混乱をもたらす。行動主義心理学者スキナーは、スチーヴンスの操作主義を取り入れることで、最も首尾一貫した「他者の心理学」を作り上げた¹⁴。スキナーの体系では、行為の意味の理解は心理学から全て排除され、言語行動のような表現行為も刺激と反応の図式によって説明されることになる。なぜ意味理解が排除されねばならないかという、表現の理解にはしばしば感情移入や追体験による他者の体験の参照が必要とされ、つまり「自己への視点」が密輸入されるからであろう。

かくして、人間的世界経験のパラドックス構造という躓きの石を回避する第一の途は、人間一般を他者一般で代表させ、表現を理解することなく行動を説明するという、純粋な他者の心理学にとどまること、図5でいえば、第一象限に留まること、ということになる。

4.4 躓きの石を回避する三つの途（2：自己の心理学）

ここまでくると、躓かないための第二の途がおのずから明らかになる。第一象限の対偶、第三象限（体験）にとどまることである。この象限において認識論を提供したのが現象学であり、研究プログラムとしては、かつてはゲシュタルト心理学やピンスワンガーの現存在分析が代表的であったが、最近では色々と現象学的心理学の技法が提案されている^{7,15}。

ここで、なぜ第4象限（意識）は、同様に自己への視点に基づくにもかかわらず、躓きの石を回避できないかについて、一言しておこう。この象限は、ニュートン、ボイルら近代科学の成立と同時代的に開始された、連合主義心理学の領域であり、近代心理学の制度的創始者とされるヴントの実験的内観法による意識心理学も、基本的にはこの象限に属する。しかしながら、歴史的にはすでにこの象限の不毛性は明らかであるし、そもそも意識を法則的説明の対象とすること自体、「意識一般」という、「人間一般」の言い換えに過ぎない概念を呼び込むことになってしまう。

かくして、躓きの石を回避する第二の途は、人間一般を「自己」で代表させ、「意識の説明」の誘惑に屈することなく「体験を理解」という純粋な自己の心理学にとどまること、図5でいえば第三象限にとどまること、ということになる¹⁶。

4.6 躓きの石を回避する三つの途（3：視点の対立軸への無効化攻撃）

躓かないためには、純粋な他者の心理学か純粋な自己の心理学しかないのだろうか。第三の途として、回避するのではなく石を取り除くこと、視点の対立軸へと無効化攻撃を仕掛けること、が考えられる。事実これは解釈学的転回や言語論的転回として、1960年代頃から人間科学認識論の中で試みられて来たことである。本稿では詳論の余裕がないが、この「第三の途」を、2段階として整理して示す。

第一段階。無効化攻撃は、もっぱら、「理解」における「表現」と「体験」の関係に向けられる。人間科学(Geisteswissenschaft)の固有の方法を「理解」とし、自然科学の方法である「説明」に対比させたのはディルタイであったが、他者の表現の理解とは感情移入によって他者自らの体験を追体験することであるとされたところに問題を残し

た。「表現」「体験」間の往還運動は自己視点と他者視点の二元論を、それゆえまた心身の二元論という躰きの石をも呼び込んでしまうからである。そこで解釈学的転回の流れでは、「理解」を感情移入のような心理学のカテゴリーでなく、意味論のカテゴリーと見なす傾向が強まる¹⁷。春になる度にいたるところで見かける「お花見の季節になりました」という言語表現を理解するのに、いちいち書き手の体験に感情移入するわけではない。私たちは生まれ落ちた瞬間にすでに、歴史的伝統的に構成された意味の理解・解釈の網の目のただなかに存在しているのだから。また、同じ意味解釈の網の目を使っている以上、自己理解と他者理解にも、構造上はちがいはない。

第二段階。表現が「意味するもの」として「意味されるもの」を指示するという意味論的前提に立つ限り、痛みのような私的経験の意味は、自己の痛みと他者のそれとで異なることになってしまう。他者の痛みの指示対象はヘンペル¹⁸の論理的行動主義が論じたように叫び声や血圧や心拍率の上昇でありその背後の脳神経過程であるのに対し、私の痛みの指示対象は私の現象学的な体験世界の変容ということになってしまうから。けれども、後期ウィトゲンシュタインが唱えた、「意味とはその使用のことである」という「言語ゲーム」の説では、このような意味で「痛み」を用いるのは、概念と言葉の誤用ということになる。たとえばウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーを称するクルターによると、痛みのような純粋に私的な経験は論理的にいつて誤ることができない（痛みを感じていると思ったが、よく観察したら痛みではなかった、ということはある）。だから、私的経験は経験的に真でも偽でもあり得るような「観察命題」を構成しないし、したがって知識にはなり得ない。「知っている」という述語に結び付けて使うことができるのは他人の痛みの方

である。その場合も、他者の近づけない内面を指示するのではない。

「痛み」という語は、物的対象の名のように使用することができない。それはむしろ、一定範囲のなすべきことを示す信号として使用される。つまり、どこが痛い、どのくらい痛いかを定めるべきだ、同情するべきだ、称賛するべきだ、医者を呼ぶべきだ、包帯、痛み止めを採ってくるべきだ、という具合である¹⁹。

エスノメソドロジー、会話分析、ディスコース分析など、言語論的転回の中で発展した質的研究の技法では、かくして、心理学・人間科学における理解・解釈とは、表現の意味を言語ゲームの中での実践的行為として明らかにすること、となる。「自己」もまた、言語ゲームの中で実践的目的によって構成された概念にすぎず、それどころか、ポストモダニズムを受けた社会的構成主義の社会心理学者であるハレ²⁰などによると、「私」という語の誤用によって生み出された誤った概念であるという。

この、言語論的転回を受けた第三の途は、「人間一般」を直接観察できないのに人間科学が成り立っているようにみえるのはどうしてか、というアポリアへの解答として有力と思われる。ただし、この第三の途の有効性は、私的な経験を指示する言葉は知識にはなり得ないという、ウィトゲンシュタインの私的言語批判の妥当性にかかっており、妥当でないならば、人間科学はドクサに基づいた砂上の楼閣になってしまうと思われるが、もはや本稿の範囲を超える²¹。

§ 5 エピローグ：パラドックスの哲学的水準への展望

人間的世界経験に潜む根源的パラドックス構造を心理学において問題化すべく、二つの水準でア

アプローチがなされた。第一の水準とは、パラドックスを、体験現象として直接に浮き彫りにすることである。そのために、§2ではマッハ的自画像を用いたパラドックス体験の誘発実験が試みられ、§3では自我体験・独我論的体験の下になされた発達心理学的研究が再検討された。第二はより間接的もしくは「メタ的」な水準であって、心理学・人間科学が誕生して以来の混乱の躰きの石がこのパラドックスであるという予想の下に、心理学史が解読された。かくして、第一に経験科学的水準で、第二に心理学史・心理学認識論の水準で、パラドックスが主題化されたのである。

ここで、エピローグの場を借りて、プロローグで示唆されたパラドックスの哲学的水準について一言しておきたい。他者問題がそれである。パラドックスが通常は自覚されないのは、他者問題が暗黙裡に解決済みと見なされているからだろう。ここでは逆に、パラドックスを構成する二つの世界(図1と図2)を用いて、他者問題を位置づけてみよう。

図6では、左に図2、右に図1をおき、二つの世界の関係を示した。他者問題とは、右の

世界から左の世界へ行けるか否かの問題として表されることになる。右の世界では私は、他者たちもまた各々がマッハ的世界の中心であることをなぜか知っているという「他者信憑」を抱いている。この信憑の由来と妥当性を問うのが、20世紀初頭という、哲学の長い歴史の中では比較的遅い時期に登場した他者問題である。他者信憑が妥当であれば、左の世界における「カブト虫」は一つ一つがマッハ的世界であるということになり、「人間一般」が根拠づけられることになる。一方、左の世界から出発して、カブトムシ箱の外(=脳神経系)によって内側(=内面世界=マッハ的世界)を説明できるか否かを問うのが、心身問題ということになる。

この図解の長所は、類推説のような論点先取の誤謬を犯している説が(註7文献 pp104-109 参照)、なぜ20世紀初めに批判を受けるまで信じられていたかを、心理学的に理解させてくれるところにある。この論点先取の心理的起源は、右図の世界から出発したつもりでも、左図の世界を密輸入してしまうところにある。純粋に右図から出発するフッサール現象学の道程が、いかなる困難に

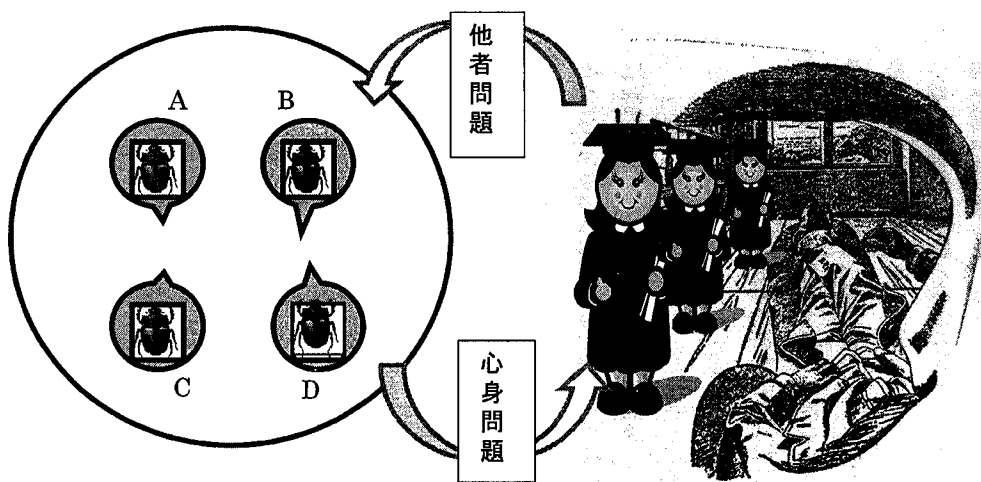


図6
左：私が「知っている」人間的世界。上空飛行的視線の下、各人に「カブト虫箱」が描かれている。

右：私が経験する人間的世界。マッハ的なく自己と他者>の世界。

出会ったか、筆者は他のところで論じたので、ここではくりかえさない²²。結論としては、他者問題が未解決で「人間一般」がドクサにとどまる以上、心理学・人間科学パラダイムの統一はありえず、互いのメタパラダイムの前提を理解しあつたうえで多元主義こそ、現場の研究にはふさわしく思われる²³。

最後に、本稿での「実験」や「調査」も他者の体験を扱っている以上、「人間一般」を前提とするのではないかという当然の疑問に対しては、註7文献を参照されたい。マッハ的世界から出発する以上、他者の体験もまた自己の可能的経験とみなされるのである。

【付記】 本稿は最初、PPP (Philosophy of Psychiatry and Psychology) 研究会 (第4回, 2013年7月20日, 東京大学駒場キャンパス) において同題で発表された。研究会の主催者田所重紀先生 (茂原病院) と幹事の榊原英輔先生 (東京大学) および出席者の方々には、貴重なコメントをいただいたことを感謝したい。

註

- 1 実験といっても、元々研究として行ったのではなく、実習課題で事例が偶然得られたということなので、鍵カッコつきで使うことにする。なお、課題提出物 (レポート) からの引用に当たっては、論文等に引用する場合は学術目的にしか使用せず、匿名化を始めとしてプライバシーの保持に努めると、事前説明したところに従った。
- 2 ユクスキュルとクリサード『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子 (訳), 岩波書店, 2005 (原著 1934)。
- 3 図2で上空飛行的視線の下に描かれた「人間一般」のそれぞれの頭にカブト虫箱があるの

は、ウィトゲンシュタイン『哲学探究』(藤本隆志 (訳) 大修館書店, 1976 (原著, 1953)) 中の、次の一節にもとづいている。

各人が一つの箱を持っていて、中には私たちが「カブト虫」と呼ぶものが入っている、と仮定しよう。誰も他人の箱の中を覗くことはできない。そして誰もが「私は自分のカブト虫を見ることによつてのみ、カブト虫が何であるかを知る」と言う (p.213)。

カブト虫の入った箱とは、私私的な心の比喩である。このような、人間の「箱型モデル」もまた、自明性の世界の構成要素である。「頭の中に箱のある多数の人間が——自分自身も含めて——上空から見える」という世界像こそ、自明なる常識的世界なのだ。

- 4 Spiegelberg, H.: On the 'I-am-me' experience in childhood and adolescence. *Review of existential psychology and psychiatry*, 4, 3-21, 1964; Kohnstam, D.: *Und ploetzlich wurde mir klar: Ich bin ich!* Bern: Hans Huber Verlag, 2004.
- 5 渡辺恒夫・高石恭子 (編)『<私>という謎——自我体験の心理学』新曜社, 2004; 天谷祐子『なぜ私は私なのか——自我体験の発達心理学』ナカニシヤ出版, 2010.
- 6 渡辺恒夫『自我体験と独我論的体験——自明性の彼方へ』北大路書房, 2009.
- 7 渡辺恒夫『フッサール心理学宣言——他者の自明性がひび割れる時代に』講談社, 2013.
- 8 描画課題での事例が自我体験・独我論的体験と判定されたことは、これらの体験の実験的誘発の方法を示唆したものとしても意義がある。これまでは、作家や科学者の自伝などに記されているのが偶々発見された「自発事例」であれ、質問紙調査や半構造化面接調査で得

られた「調査事例」であれ、すべて回想事例に基づいて、自我体験研究は行われていたのだった。体験が誘発される現場をリアルタイムでとらえることができたことは、自我体験研究において方法論的に大きな意義を持つであろう。

- 9 ブランケンブルク『分裂病における自然な自明性の喪失』木村敏, 他 (訳), みすず書房, 1978 (原著, 1971)
 - 10 三浦俊彦「意識の超難問の論理分析」科学哲学, 35-2, 69-81, 2002.
 - 11 Stevens, S. S.: The operational definition of psychological concepts. *Psychological Review*, 42, 517-527, 1939.
 - 12 操作主義哲学はスチーヴンスを介して行動主義心理学の認識論として君臨するにいたったが、後者が没落しても科学認識論として操作主義の覇権が続いていることは、アメリカ精神医学会の手引書 (DSM) が、第Ⅲ版 (1980) 以降、操作的診断基準を採用していることを見てもわかる。佐藤裕史・Berrios, G. E. 「操作的診断基準の概念史：精神医学における操作主義」精神医学, 43(7), 704-713. 2001.
 - 13 渡辺恒夫「質的研究の認識論」やまだようこ・麻生武, 他 (編)『質的心理学ハンドブック』(Pp.45-75), 新曜社, 2013. 図3～図5についての議論も、この文献参照。
 - 14 Hardcastle, G. L.: S. S. Stevens and the origins of operationism. *Philosophy of Science*, 62, 404-424, 1995.
 - 15 ジョルジ『心理学における現象学的アプローチ——理論・歴史・方法・実践』吉田章宏 (訳), 新曜社, 2013 (原著 2009) .
 - 16 人間一般を「自己」で代表させるとは、「自己一般」で代表させることではないことに注意しなければならない。「自己一般」では、
- 図2での自明性の世界で各自の頭の中に住む「カブト虫一般」のようなものになってしまう、人間一般を密輸入することになる。図1でも見るように、「自己」とは唯一の存在なのだから。もっとも、自己一般を密輸入せずに「自己の心理学」を実践することは難しい。拙著『フッサール心理学宣言』(註7文献)は、「一人称的読み」の技法化によって、自己の唯一性を確保したまま実践できる心理学として構想された。そこでは「他者の自己」は可能的自己と見なされるのである。
- 17 フォン・ウリクト『説明と理解』丸山高司 (訳) 産業図書, 1984 (原著, 1971).
 - 18 Hempel, C. D.: Analyse logique de la psychologie. *Revue de Synthèse* 10, 14-19, 1935
 - 19 クルター『心の社会的構成：ウィトゲンシュタイン派のエスノメソドロジー』西阪仰 (訳), 新曜社, 1998, (原著 1979), p.132
 - 20 Harré, R.: The language game of self-ascription. In K. Gergen, & K. E. Davis (Eds.), *The social construction of the person* (pp. 259-263). NY: Springer-Verlag, 1985.
 - 21 (仮題)『他者論で脱構築する心の科学史』(北大路書房、印刷中)で、私的言語批判の批判をこころみる予定である。
 - 22 註7文献, pp56-71参照。また、註21文献でも、「だれでも分かる他者問題超入門」という付章を置いて、他者論を歴史的に検討する予定である。
 - 23 多元主義については、心理学では、筆者も寄稿している *New Idea in Psychology* 誌 28(2), 2010 号の "Special Issue: Theorizing Pluralism" を、精神医学では、ナシア・ガミア『現代精神医学概論』(村井俊哉 (訳) 医学書院, 2009 (原著, 2003) を参照のこと。